

# 「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



永谷 芳清さん  
大正13年12月6日生まれ。  
木野在住

## 私の生まれと幼少期

私は大正13年12月6日、永谷家の長男として木野地区の北4線沿いで生まれました。父は親戚を頼って香川県から移住、木野村農場の小作人として農業に従事していました。幼い頃、店でキャラメルを1個買ってもらい、畑で働く両親の傍らで遊んでいたことを思い出します。

数年後、家族は鈴蘭高台に引っ越しました。この地域は風が強く、上級生に助けられながら1時間かけて、下音更小学校に通いました。父は家族のために収入を増やそうと、牛を飼育していました。当時、10軒の農家が交代で集めた乳缶を馬車に積み、水で冷やして帯広の集乳場へ運びました。

父を手伝い、大きな乳缶を持ち帰るのは、重く冷たい辛い仕事でした。

## 父親代わりとなり、現在地へ転居

### 昭

和12年、父は弟が生まれた3日後に出征、翌年中国で戦死しました。父の遺骨を胸に抱き「父の無念は自分が果たす」と心に誓った悲しい経験も、今では懐かしく思い出されます。

私は4人の弟妹の父親代わりとなり、昭和15年、内地へ移る人の跡地を購入、現在地に転居しました。ここに来てからは、アイヌの人たちが私の先生で、手取り足取り畑仕事を教えてくれました。そのおかげで一人前に馬を使いながら、借地と合せて10町歩を母と共に耕作することができました。

## 海軍入隊、空襲による妹の死と終戦

### 私

昭和19年10月に海軍入隊しました。翌年7月15日、音更村に米軍機が来襲し、自

宅近くの防空壕へ避難する途中、1発の凶弾が妹の体を突き抜けて19歳の命を奪い、さらに母の腰に当たり、大きな傷跡を残しました。「ちくしよ」の一言、これが妹の最後の言葉でした。私はその知らせを受け、急遽帰り、父のお墓の横に土葬してあった妹の遺体を掘り出して帯広の火葬場まで馬車で運び、ようやく茶毘に付すことができました。

開進地域周辺には自宅の後ろの家を境に飛行機が旋回しながら爆撃し、無数の穴がありました。戦車退避壕や変電所、北には亜麻会社があったから狙われたのだと思います。

## 周囲への感謝と平和の大切さ

### 苦

労を重ねてきた母は、昭和48年に75歳で亡くなりました。倒れるその日も一生懸命に働き、家に帰ってお風呂を焚こうとして倒れ、意識がないまま数日後に自宅で亡くなりました。生前の母の希望で、葬儀は自宅で執り行いました。

現在、私の長男は札幌で働



苦労を重ねた母親ミツの肖像画

き、娘3人が近くに居を構え、いつも見守ってくれているので、私たち夫婦は安心して暮らしています。毎週、代わり番で食事会に呼んでくれたり、「足腰が丈夫でいてほしい」と願いを込め、愛犬ゴンタを贈ってくれました。

今から思えば、多くの先輩たちは沖繩で戦死し、私たちの世代は戦争一色の青年時代を過ごしました。生きてその先にある未来というものを考えたことがなかったのです。人間は一人では生きていけないから、皆さんにお世話になって今日がある、皆さんのおかげで生かされているのです。何よりも戦争のない世の中、平和であることを、自分の辛い体験を通して切に願います。